



企画展

2018年
2月22日(木)
3月31日(土)
【休館日】毎週月曜日

香合こうがう ひゃっか 百花繚乱りょうらん

A Bouquet of
Incense Containers

「香合」は、「香を入れる蓋付きの容器のこと。小さく愛らしい姿・形から、茶の湯の道具の中では特に人気の高いものです。

日本で香合が使用され始めたのは、仏教とともに香が渡ってきた6世紀頃と考えられます。貴重な香を入れる容器もまた、当初は貴重な唐物の漆器でした。ところがその後、茶の湯の流行に伴い、さまざまな種類の香合が生まれます。黄瀬戸や志野など国内で作られた最新のやきもの、蒔絵の古い箱、螺鈿・染付・青磁など新しい唐物、雅な御室焼の色絵・染焼等々。素材は漆からやきもの・唐銅・牙など多岐にわたり、形状も丸・角だけではなく、植物や動物・楽器をかたどったものなどバラエティーに富みます。香合

ほど、種類が豊富で、それぞれが独自の魅力を持つ茶道具は他にありません。19世紀には日本各地の窯で生産されるようになり、さらに、幕末には「形物香合番付」と呼ばれる中国産のやきものを中心とした香合の番付表が作られるほど、人気を博しました。

根津美術館の基盤となるコレクションを蒐集した初代根津嘉一郎も、茶の湯の香合を好んで求めたため、当館には250点を超える香合が収蔵されています。このたびの展覧会では、館蔵品を中心に約170点を展示し、香合の百花繚乱の世界をご覧いただきます。やきものから漆工まで、茶席を彩る小さな香合の愛らしい姿をお楽しみください。



香合 百花繚乱

企画展
展示室1

A Bouquet of
Incense Containers



交趾焼は中国福建省漳州付近で生産された低火度焼成による三彩。動物や植物をあらわした合子が、日本では香合として賞玩された。なかでも大亀は人気が高い。少し上を見上げた顔に、丸い大きな目とぼってんに刻まれた口が愛らしい。

交趾大亀香合 漳州窯 施釉陶器 中国・明時代 17世紀
根津美術館蔵



もとは手箱の中に収められていた薫物箱。歯黒箱や白粉箱と共に、16世紀末期より茶の湯の香合として転用された。合口に錫などの金属で作られた縁が施されていることから、錫縁香合とも呼ばれる。蓋表には金蒔絵で菊花があらわされている。

菊蒔絵香合 木胎漆塗 日本・桃山時代 15-16世紀
根津美術館蔵

何層にも塗り重ねた漆を彫って文様をあらわす彫漆の香合。渦状の文様は、日本では屈輪文と呼ばれる。彫り口にカラフルな色漆の層が見える。



堆黒屈輪文香合 木胎漆塗 中国・元時代 14世紀
根津美術館蔵



ふっくらとした姿と、油揚手と呼ばれるかせた釉薬により、黄瀬戸香合の名品として知られる。頂部に打たれた胆礬が鮮やかな緑色に発色している。

黄瀬戸宝珠香合 美濃 施釉陶器 日本・桃山時代 16世紀
根津美術館蔵



六面体の細長い形は、ぶりぶりぎつちょう振々毬杖と呼ばれる遊戯で用いる木製の槌をかたどったもの。松竹梅や鶴亀・宝珠など吉祥文が色絵で描かれている。

色絵ぶりぶり香合 野々村仁清作 施釉陶器 日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

鱈口は仏堂正面に吊り下げられる仏具で、中央を打って音を出す。紐を通す鈕や、共鳴のために設けられる下半の開口部もあらわされている。



鱈口形香合 伝楽宗入作 施釉陶器 日本・江戸時代 17-18世紀
根津美術館蔵

中国景德鎮窯産の古染付横唄香合を幕末の京都の陶工・永楽保全が写したもの。古染付や交趾は人気が高く、日本各地の窯でその写しが作られた。



染付横唄香合 永楽保全作 施釉磁器 日本・江戸時代 19世紀
根津美術館蔵



黒漆の上に朱漆を重ねた根来塗。平らな円形の合子は一字形と呼ばれ、唐物漆器の影響を受けたもの。胴部の割れは金属の錠で留められている。

朱漆香合 竹胎漆塗 日本・江戸時代 17-19世紀
根津美術館蔵

同時開催

展示室2

釜

—茶席の主の姿—

香合が茶事では炉や風炉に炭を組み入れる際に用いられるのに対し、釜は常に茶室に置かれることから茶席の主と称されます。茶の湯の道具としての釜の展開をご覧ください。



丸い肩から広がる口を十王口といい、胴の正面には「方丈」背面には「得月 雪村筆」の文字を陽鑄する。筆者は画僧雪村周継である。

こてんみょうじゅうおうぐちがま
古天明十王口釜 1口 鑄鉄
日本・室町時代 16世紀 根津美術館蔵



柔らかく角を面取りして四方にした釜は、利休好みと言われている。胴の各面には「新古今和歌集」の藤原定家の歌を鑄出している。

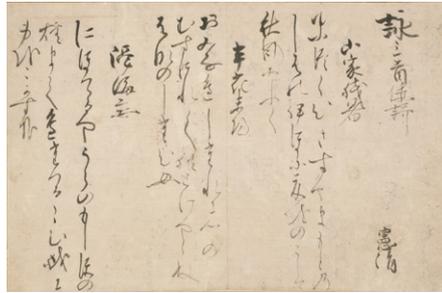
よほうひろくちがま
四方広口釜 1口 鑄鉄
日本・江戸時代 18世紀 根津美術館蔵

展示室5

歌詠みの書

—懐紙と短冊—

歌会で自詠の和歌を書いて提出した懐紙や短冊は、詠者の筆跡の基準作です。和歌と書からその人なりに思いを馳せていただきます。



奈良の春日社や興福寺を中心とする神官や僧侶たちの歌会で記された懐紙。その裏が『万葉集』書写に再利用されたために残った。

かすがかいし けんせい
春日懐紙 憲清筆
日本・鎌倉時代 13世紀
根津美術館蔵



京都・貴布禰社の神官で歌人でもあった鴨祐夏(1325頃生存)の短冊。初期の短冊は装飾もなく、形もやや小さめである。

かものすけなつ
短冊 鴨祐夏筆
日本・鎌倉～南北朝時代 14世紀
根津美術館蔵

展示室6

花月の茶

草木が芽吹き、花開く三月は「花月」の異称を持ちます。季節の茶道具約20件の取り合わせで、うらかな春の訪れを感じてください。



透明な青緑色の釉薬が艶やかに掛けられた花入は、中ほどが丸く膨らんだ中蕪形。春の山を詠んだ古歌より「夕端山」と銘が付けられた。

せいじなかがぶらはいれ ゆうはやま
青磁中蕪花入 銘夕端山 龍泉窯 施釉陶器
中国・明時代 15世紀 根津美術館蔵



桜が描かれた色絵の鉢。濃い色の赤や緑の絵の具より、古九谷様式に分類される。後に塗り蓋が添い、水指として転用されるようになった。

いろえおうかまんみずさし
色絵桜花文水指 肥前 施釉磁器
日本・江戸時代 17世紀 根津美術館蔵

関連プログラム

講演会 「形物香合番付」
日時 3月10日(土) 午後2時～3時30分
講師 神崎かず子氏(愛知県陶磁美術館 副館長)
会場 根津美術館講堂 定員130名
〈申込方法〉 当館ホームページの「イベント情報」の申込みフォームから、または往復はがき(1参加者1イベントにつき1枚)に参加を希望されるイベント名・住所・氏名(返信面にも)・電話番号を明記の上、〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1 根津美術館講演会係宛にお送りください。
※ 先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。

スライド 「香合百花繚乱」 3月9日(金)、3月16日(金)
レクチャー 講師 下村奈穂子(根津美術館 学芸員)
「歌詠みの書」 3月23日(金)
講師 松原茂(根津美術館 学芸部長)
時間 各回午後1時30分から約45分間。
会場 根津美術館講堂 定員各回130名

※ 担当学芸員が展覧会の見どころをスライドを用いて解説いたします。開始の15分前より開場。
※ 先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。

ギャラリー 「釜」 2月23日(金)、3月23日(金)
トーク 時間 各回午前11時から約30分間
講師 長野烈氏(金工家)
会場 展示室2 定員各回20名
※ 参加ご希望の方には午前10時より美術館受付にて整理券を配布します(お一人につき1枚)。開始10分前に、整理券をお持ちのうえ、ホール階段下へお集まりください。
※ 先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。

※ 参加は無料ですが、入館料をお支払いください。

開催概要

展覧会名 企画展「香合百花繚乱」
主催 根津美術館
開催期間 2018年 2月22日(木)～3月31日(土)
開館時間 午前10時～午後5時[入館は午後4時30分まで]
休館日 毎週月曜日
入館料 一般1100円(900円)
学生800円(600円)
※()内は20名以上の団体料金、中学生以下は無料
前売券 一般900円 学生600円
※ 2018年1月10日(水)～2月12日(月・祝) 企画展「墨と金―狩野派の絵画―」展開催期間中、根津美術館ミュージアムショップにて販売
アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道)駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分
住所 〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
お問合せ tel. 03-3400-2536 (代表)
hp. <http://www.nezu-muse.or.jp>

特別催事

「はじめての炭点前鑑賞 一薄茶付き」 3月15日(木)
※ 追って参加券の販売をいたします。詳細はHP、または電話にてお問い合わせください。

次回展



(左) 国宝 燕子花図屏風(部分) 尾形光琳筆 日本・江戸時代 18世紀 根津美術館蔵
(右) 重要文化財 銚子焼付金彩絵替土器皿(5枚のうち) 尾形乾山作 日本・江戸時代 18世紀 根津美術館蔵

こうりん けんざん
特別展 光琳と乾山
—芸術家兄弟・響き合う美意識—

2018年 4月14日(土)～5月13日(日)

画家でありデザイナーでもある尾形光琳とその弟で陶芸家の乾山。二人の個性と美の交わりを展観します。